

||||||| 資 料 |||||

A・ガルチンスキー：

現代ネオリカーディアンズの価値論

見 野 貞 夫 訳・解説

最近、ブルジョア経済学の思想には「マルクスの復興」といった新しい現象がみちあふれてきたが、そこには、一面、科学的共同（産）主義^{コミュニズム}の影響力増大と、他面では、ブルジョア経済学の危機とが独自の形態において、うつしだされている。これに関連して、マルクス主義経済学の前には、この現象のもつ社会経済的本質と階級の性質を解明する課題が立っているが、この課題は、理論的意義をもつのみならず、イデオロギー上の意義をも有する。

われわれの見解によれば、「復興」の基礎には、何よりもまず、ブルジョア経済学の階級的な志向が介在する。マルクスの理論的遺産がたえず高まってくる条件の下では、ブルジョアジーのイデオログたちは、マルクスの科学的価値をみとめざるをえないが、このことは、かれらをして、マルクス主義のいっそう曖昧な手のこんだ改ざんの手法へと立ち向かわせる。「復興」のもつこうしたイデオロギー上の局面と相並んで、その認識論上の根幹——これを解明することは、ブルジョア経済科学のうちに生起する新しい過程の内容を明らかにする上で原則的な重みをもつわけである——をも勘案してみる必要があるだろう。

ブルジョア経済学は、発展の相異なるさまざまな段階にわたって、マルクス経済理論の信用失墜とか、それが社会の発展に及ぼす革命的影響を過小評価してみせるとかの戦略的な任務を追求するのに、いろいろとそれを改ざんするための戦術的手段を適用してきた。だが、マルクスの経済学遺産にたいして否定的な態度全体の背後には、客観的な関係も隠れている。すなわち、『資本論』が経済学史において、非常にきわ立った足跡を提示してきたので、ブルジョア経済学は、つねに直接または間接に、マルクスによる理論的分析のシステムからその個々の要素を借用せざるをえなかった。このことは、マルクスの作品のうちに開発された資本の再生産過程と蓄積、その流通面での科学的な分析装置を利用しようとする、今日でも種々さまざまなブルジョア学派によって広く試みられる企てにも、あてはまる。しかしなが

ら、具体的に、経済学の研究用具を利用するにさいして、ブルジョア経済学が多岐にわたるいろいろな流派は、労働価値説と、これにもとづく、マルクスの経済学説にとって要石ともいふべき剰余価値理論とを否定するという点では、一つになってきた。「復興」において新しいものとはいえば、マルクスの労働価値説に注意を向けること、「その内容を改良し発展させるにとどまらず、それをブルジョア経済学のシステムに統合しようとする企画に存する。この傾向は多種多様なブルジョア学派と流派を代弁する広汎な文献にうつしだされた」¹⁾。だが、何と云っても、この傾向がもっとも広く普及しているのは、最近になってきわめて色めいてきたネオ・ケインジアンズのブルジョア経済思想内の一派から分岐したネオ・リカーディアンズ派においてである。

ネオ・リカーディアンズの現物的価値論見解とマルクスの労働価値説の対立関係

生産手段の私有にもとづく資本制経済にあつては経済関連の全総体は価値諸関係のシステムに集約される。価値は、システムを形成する生産関係の役目としてあらわれるが、その関係は経済の全環に浸透して、それを一つに結合する。「価値という概念は——とエンゲルスは書いている——商品生産という経済的条件のもっとも一般的な、それだから全体包括的な表現である。」²⁾マルクスは、L・クーゲルマンへの周知な書簡のうちで、「科学〔経済学—引用者〕の課題はまさに価値法則がいかにより自己を貫徹するかを明らかにする点にある。」³⁾のだと強調した。科学的共同主義の創始者たちによるこうした諸規定はマルクス主義経済学だけにかかわるのではない。ブルジョア経済思想のあれこれの流派のうちで、価値論が、公式上、いかように位置づけられようとも、これにおかまひなく、価値諸関係システムはつねに経済学を認識する過程の客観的基礎となる役目をおびてあらわれる。

1) P. Craig, M. Stephenson, *Marx's Theory of Exchange, Alienation and Crisis*, California, 1973; E. C. Kast, *The Value Theory of Karl Marx*, New York, 1976; *Marx's <Capital> and Capitalism Today*, 1977, 1978, vol. 1, 2; R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, London, 1973; A. Walker, *Marx: His Theory and Its Context*, London, New York, 1978

2) マルクス・エンゲルス全集 (ロシア語版), 第20巻, 322頁

3) " 全集 , 第32巻, 461頁

ブルジョア経済学危機の現段階は、方法論の見地からすれば、何よりもまず、^{マジナリズム}限界分析方法論の危機、つまり長年間にわたってブルジョア価値論の一変型の資格であらわれ、かつこれに関連して、経済的現実を認識する方法論的機能を果たしてきた限界効用なり限界生産力の諸理論が科学としては成り立たないのをみとめることと結びついている。経済諸過程を分析する新しい理論的基礎の模索は、ネオ・リカーディアン派の代表者たちを含めたブルジョア経済学者を強制して、マルクスの労作に理論的に一貫して叙述されている労働価値説に留意させている。この点において、ブルジョア経済学の文献には労働価値説に注目する傾向が強まる客観的前提の一つがあらわれている⁴⁾。

この関連できわめて特徴的なのは、ネオ・ケインズ派のリーダーと目されるJ・ロビンソンの見解における変遷ぶりである。初期の作品の一つでは、次の命題が提示されている。すなわち、「何ゆえにマルクス主義のシステムは、まったく不要の、そして矛盾にみちたものから解放されたり独創的な分析システム——マルクス主義システムはその欠陥にもかかわらず、まったくこのようなものになりうるはずである——になったりしないのだろうか？原因は価値論がドグマ化しているところにある。」⁵⁾これに反して、1979年、50年にわたる学問活動成果を集約したさいには、J・ロビンソンは「マルクスを真摯な経済学者として研究すること」の必要性を論じようとする。マルクスの価値論を——と彼女は云う——資本主義に矛盾する何ものかとして考えるころみはおよそ誤りである⁶⁾。

同じような見解変化の例は、ネオ・リカーディアン派のもう一人の代表者、マルクス経済理論の一連した作品の著者である森嶋通夫の活動にもみとめられる。たとえば、1973年出刊の『マルクス経済学——価値と成長の二重性理論』——この作品の批判的分析は、ソビエトの経済関係についての出版物で広く述べられている——においてかれは次のように述べた。すなわち「マルクスの経済学説が現代経済理論で市民権を取得しうるのは、労働価値説という根幹から離脱することにもとづく場合だけである。」⁷⁾しかしながら、丸5年を経過した後のG・ケティフォリスとの共同著書『価値、搾取及び成長——現代経済理論から照射するマルクス』においては、以前とは反対の見解が宣言

4) 「新古典派モデルを拒絶した結果の一つとしてあらわれるのが——とJ・ガルブレイスは書いている——マルクス理論にたいする関心の増大である。(J・K・ガルブレイス, 経済理論と社会目的, プログレス出版局, 1976年, 55頁)

5) J. Robinson, Collected Economic Papers, vol. V, Oxford, 1951, p.145

6) ——, Contribution to Modern Economics, Oxford, 1979, p.66, l.84

7) M. Morishima, Marx's Economics, A Dual Theory of Value and Growth, Cambridge, 1973, p.194

される。この作品の主要な目的は、「《Marx's Economics》で十分満足のいくように述べられなかった労働価値説を再考してみることにあったと⁸⁾。

イギリスの経済学者P・スラッファによる作品『商品による商品の生産』——そこでは単純再生産と拡大再生産の数理的方程式にもとづいて、「基準生産物」の価値単位をもってする最初の商品計測理論のモデルを定式化する企画が提供されている⁹⁾——の公刊はブルジョア経済科学による労働価値説への転向を意味した。P・スラッファの計算では、ロシアの数理経済学者ヴェ・ドミトリエフの開発した、商品再生産の下で必要となる完全な労働支出を決定する方法が使用された¹⁰⁾。P・スラッファは、ドミトリエフの数理的計算に立脚して、いわゆる「穀物」経済部門——これはD・リカードの考えたように、「商品価値の不変な標準尺度」として役立つであろう——に関するD・リカードによる周知の考えを展開した。P・スラッファのシステムでは、交換比率と同類の尺度として、価格上の平均賃金水準にふさわしい、労働者用に典型的な使用商品財の組成を統合する何らかの商品集計体があらわれる。「標準商品」と名づけられた一定の集計体は、P・スラッファの表現を借りると、「純粋に補足的な構成」(purely auxiliary construction)であるが、この構成にもとづき、価格方程式を、全体として商品を比較する基礎ともなるいわゆる「日付のある労働」(dated labour)に帰していく還元がおこなわれている¹¹⁾。これに応じて、「標準商品」は、P・スラッファの理論構成においては、商品を比較する純粋に計算上の価値尺度財(numéraire)単位をあらわした価値の独自の現物的類似物^{アナログ}だと宣告される。

労働支出を、商品測定的基础に伏在する起点環とみるP・スラッファの規定は、かれ

8) ———, G. Catephores, Value, Exploitation and Growth, Marx in the Light of Modern Economic Theory, London 1978, p.19

9) 「P・スラッファの著書は——とR・ミークは書いている。——伝統的な価値の諸問題を解決するのに新しい方向を開いた。」(R. L. Meek, Economic Ideology and Other essays, London 1967, p.10)。

10) 単位生産物の労働時間による完全支出の評価づけについてのヴェ・ドミトリエフの範式($X_i = \sum_{aj} a_{ij} x_j + t_i$, ただし、この場合、 x_i —完全労働支出、 x_j —投入生産物の当期労働支出、 a_{ij} —技術係数、 t_i —第*i*生産物の生産における当期労働支出)は、ソビエト経済学者、海外の経済学者の現代的経済数学計算で広く用いられている。(cf. B. C. Немчинов, Избранные Произведения, т. VI, Изд-во Наука, 1960 г., стр. 340, 391)。

11) 「物的生産部門は——とP・スラッファは書いている——純標準生産物がそれによって購入できるところの、そうした労働分量によって測られるのである。」(P. Sraffa, Production of Commodities by Means of Commodities, Cambridge, 1960, p.32)。

がマルクスの労働価値説に従うかのような外観をつくりだし、そしてR・ミークもみとめるように、「その有機的構成が社会的な平均値にひとしいところの資本によって生産された商品をマルクスのように分析することに接近した類似物である。」¹²⁾ こうした観点はM・ドップによっても広く宣伝されたが、かれは、P・スラッファのシステムが「…価値問題にたいするリカード—マルクスによる接近方法の復^{レアリテーション}権」だと考えた¹³⁾

労働価値説を「復元」し「展開」を図かろうとしたネオ・リカーディアン一派の経済学者によるところみは一義的に評価づけてよいというわけにはゆかない。P・スラッファ、森嶋通夫、その他、同学派の経済学者の労作においては、限界効用の主観的俗流理論の、科学としての破産は論証済みであるが、この理論の生成と発展こそ、マルクスの労働価値説にたいする独自の反撃であったわけである¹⁴⁾ 労働が経済過程の起点となる唯一の客観的根本基礎(первооснова)だというブルジョア古典経済学の、とっくの昔に投げ捨てられた基本的規定に復帰しようところみるブルジョア経済思想の努力もまた強まりつつある¹⁵⁾

しかしながら、こうした積極的な諸契機も、真に科学的なマルクス主義的な理解にねざした労働価値説の側にかれらが動いて来ることを、いささかも証明しはしない。ちょっとみると、労働価値説のほうに志向しているように思えるにもかかわらず、ネオ・リカーディアン学派の経済学者による理論的構築の方法論は、P・スラッファのを含めて、資本の生産力理論の限界内にかぎられている。自分たちの社会=階級的立場のせいで、かれらは、ブルジョアの形而上学の方法とは絶縁できないでいる。この結果、資本制諸関係のネオ・リカーディアン的研究の積極的材料も、交換関係、交換概念の境界の外には脱出していない。

ネオ・リカーディアン一派は、D・リカードの「新しい」解釈という企画、つまり

12) R. L. Meek, Smith, Marx and after, New York, 1977, p.103

13) M. Dobb, Theories of Value and Distribution since Adam Smith, Cambridge, 1973, p.257

14) スラッファの著書には——とイ・オサドチャヤーには書いている——「新古典派による価値論にたいする論理的批判の最終的一般化が与えられている。(《Мировая Экономика и Международные Отношения》, No. 8 1980, стр. 96)。

15) アカデミ会員ヴェ・エス・ネムチーノフは、『社会的価値と計画価値』という基本研究において、次のように書いたのである。すなわち、労働生産物を標準集計体の単位で測かるといったP・スラッファによって最初に提示された手法は、「生産物それ自体の間の相互関係にもとづいて物的生産部門の構造を測定する場合でさえ、労働支出が不可避に注目されねばならないということの例として」考えることはできる(B. C. Немчинов, Избранные Призведения, т. VI, стр. 15, 16)。

その理論の個々別々の要素を現代ブルジョア経済学のシステム——それは、D・リカード理論の「真実な」内容がヴェ・ドミトリエフ—P・スラッファの考え方にもとづいてのみ理解できるのだという確認にもとづいている——に総合する企画をとりあげる。ドミトリエフは——とM・ドップは書いているが、——リカードのシステムを防守した。P・スラッファについては、どうかといえば、M・ドップの見解によると、『商品による商品の生産』といったかれの作品は、「リカード学派の再生」に基礎を投じただけではなく、まさしく「リカード理論のマルクスによる真の理解」¹⁶⁾をも解明した以外の何ものでもなく、それ以上でも、以下でもない。

マルクスは、科学を前に立ったD・リカードの大きな歴史的功績をみとめはするが、同時に、リカードの首尾一貫しない二元論の要素——これは、すでにリカード存命中にも、この学者の考え方を偽造する基礎として役立っていた——を強調した。何よりもまず、問題となるのは、利潤という範疇を、いくつかの場合に誤って論じたり、これにもとづいて「価値」と「生産価格」を混同したりする点である¹⁷⁾。はっきりしている点は、ブルジョア経済学のネオ・リカーディアンの代表者たち一派による価値論モデルの理論的構築が、経済学史においてD・リカードの占めた真実の位置を決定づけている積極的材料にもとづくことなくして、19世紀のこの偉大な学者が成しとげた主要な科学的寄与からは逸脱するような諸規定にもとづいていることである。D・リカードの一貫性を欠く諸要素を絶対化することによって、ネオ・リカーディアンズは、明らかに、かれの理論上の遺産を改ざんするのである。

ネオ・リカーディアンズの価値論理解は、その支持者がみとめるように、基礎をヴェ・ドミトリエフの作品におくものだからして、ブルジョア経済学のネオ・リカーディアン支脈(ветвь)のすべてはかれの数理モデルの上に築かれる¹⁸⁾。それゆえに、ネオ・リカーディアンズによる価値論述の真実な内容を理解するためには、ヴェ・

16) M. Dobb, op. cit., p.258, 247, 143

17) この問題にふれて、ラーサルへの書簡中でマルクスは次のように書いた。すなわち、「リカードは利潤問題を展開したものの、矛盾におちこみ…この矛盾はかれの学派をして、学派の基礎それ自体を完全に拒絶するか、そうでなければ、もっとも嫌悪すべき折衷主義に至るかにみちびくことになった。」(マ・エ全集、前掲書、第29巻、45頁)と。

18) たとえば、アメリカの経済学者J・ヤングは、「古典派的伝統」の展開に向うヴェ・ドミトリエフの功績をみとめて、D・リカードとP・スラッファの関連はドミトリエフの所説で基礎づけられているのだと述べている。(J. Young, Classical Theories of Value; from Smith to Sraffa, Colorado, 1978, p.75)。

ドミトリエフの相対的商品の数理的な価値論モデルに留意しなければならないが、このモデルは、M・ドップの表現を借りると、「スラッファシステム核心をなすのである」¹⁹⁾ 議論になっているのは、生産物Aと生産物Bの交換価値もしくは「相対的価値」を表現する以下の範式である。

$$Y_{\alpha\beta} = \frac{N_{\alpha} a x_{\alpha} (1+r)^{t_{\alpha}}}{N_{\beta} a x_{\beta} (1+r)^{t_{\beta}}}$$

ただし、ここで $Y_{\alpha\beta}$ は生産物A Bの相対価値、 N_{α} と N_{β} —生産物A、Bを生産するのにそれぞれ必要な労働分量、 a —労働者の一日に消費する生産物量もしくは実質賃金、 x_{α} —A生産物の価格、 r —平均利潤率、 t —生産物の生産時間（生産期間の数値）である²⁰⁾

この範式の内容を明らかにして、ヴェ・ドミトリエフは、生産物A、Bの生産にかかる時間がひとしい ($t_{\alpha} = t_{\beta}$) と仮定すると、数理式の変形によって、 $Y_{\alpha\beta} = Y_{\alpha} / Y_{\beta} = N_{\alpha} / N_{\beta}$ の表現となるが、これが何を明らかにするのかといえば、「生産物(A)と(B)の相対的価値が生産物(A)単位の生産に支出された労働分量と生産物(B)単位の生産に支出された労働分量の関係にひとしく、だから生産物(A)の単位価格が生産物(B)の単位価格にかかわることは生産物(A)単位の生産に支出された労働量が生産物(B)の単位に支出された労働量にかかわると、同じであるという点である。』²¹⁾ 労働支出を、商品の比較較量の基礎に介在する起点環としてとらえるヴェ・ドミトリエフの結論とP・スラッファの結論は、全体として、同じであるが、そうだからといって、これに、ブルジョア経済学者がそうするように、視点をおくわけにはゆかない。

ヴェ・ドミトリエフの範式では、商品「価値」の構成要素の資格において、数値 $\langle r \rangle$ —つまり平均利潤率が姿をあらわす。生産物の価値としてかれらの理解するのが生産価格だということを勘案してみるならば、一定の構成要因を利用する正当性それ自体は、何ら疑問をよびおこしようはない。しかしながら、労働価値説にあって決定的論点となるのは、利潤の財源、その実体的基礎についての問題である。

19) M. Dobb, op. cit., p.259. このモデルの内容に関して、イギリスの経済学者デサイはこう書いている。すなわち「ドミトリエフは、このモデルにもとづいて、リカード利潤論の正しさを数学的に証明した。」と (M. Desai, Marxian Economics, Oxford, 1979, p. 81)。

20) cf. В. К. Дмитриев, Экономические Очерки, Москва, 1904 г., стр. 17

21) Дмитриев, там же.

「理論的には——と、この問題の内容にかかわって、ヴェ・ドミトリエフは書いた——生産に生きた労働の一単位も参与しないほどに、全生産物がもっぱら機械の作業によって生産される、そうした場合は、…想像できるし…その上になお、この場合でも、一定条件の下では、生産に賃労働者を使用する現代の資本家がうけとれる利潤とは本質的に何ら区別されない産業利潤も発生しうる。」²²⁾ ごらんのように、これら文章を草した著者は、利潤とは、本質からして、剰余価値の転化形態であり、そして剰余価値の唯一の源泉が生きた労働の支出だということをもとめることから、およそほど遠いのである。商品Aと商品Bを比較するさいに、単に算術の計算をおこない、所与の諸商品「価値」の構造において、同等な数値となる乗数 $\langle r \rangle$ を少なくして、ヴェ・ドミトリエフは、労働支出の「純粋な」指標を求めていったが、このようにしてネオ・リカーディアンの価値理解がまさに方法論的にもとづいている、その「奇蹟」をつくりだしてみせたのである。

同じようにスラッファもふるまう。すなわち、さまざまな経済部門の利潤率を同等な数値だと仮定して、かれは、それが商品交換の関係に及ぼす影響を抹消し、同時に、利潤源泉の問題は不問に付して済ましてしまう可能性を手にする。この関連で明白なのは、かれの構想によると、物財的支出を労働支出に帰する還元は、賃金財 (wage goods) グループつまり賃金と相関している商品グループにだけかかわることである。全体として、ヴェ・ドミトリエフと同様に、P・スラッファは、事実上、「労働支出と賃金」といった、資本の生産力理論の基礎をなす範式の境界外に出るものではない。

もっとも著名な作品の一つにして、再生産の諸表式が分析されている『資本蓄積論』において、J・ロビンソンによって描かれた彼女の理論的構成では、生産手段の価値部分は償却控除の姿をとって新しくつくられた価値に含まれる²³⁾ したがって、最小の生産的支出によって決定づけられる森嶋通夫の「真正な価値論」といった考え方も、不変資本部分の現物要素と価値要素との混同にもとづいている。きわめて目をひくのは、こうした局面において森嶋通夫とJ・ケティフォリスが、マルクスの労働価値説も「訂正」しようとする点である。「マルクスのもとでは——とかれらは書く——不変資本の価値は時間関数に比例して償却される。ノイマンによって用いられた別ないま一つの方法は利用済みの技術の価値は「不変資本」の項目に含まれるし、生産の経過後に機械にとどまる残部の価値は生産された価値 (value of output) に含まれる (新しくつくられた価

22) Дмитриев, там же, стр. 29

23) この点については、Вл. Афанасьев, Буржуазная Экономическая Мысль 30 ~ 70 годов XX века, Изд-во Мысль, 1976, стр. 217 - 220. をみよ。

値と読め——引用者)」とし、さらに著者たちは書きつづける。すなわち、仮にもマルクス主義が1818年ならず1920年に生まれて、経済学者と最初に接触をもったのが1843年ならず1945年であったものならば、かれは、リカードのモデルならず、レオンティエフとノイマンのモデル……に向って従ったことであろう。それだから、マルクスが「価値と搾取の理論を改訂し定式化し直そうとしたらろうことは考えられうるのだ」²⁴⁾。ここでは望まれるものを現実ととりかえようとする傾向がよみとれる。その方法的観点にネオ・リカーディアンズが立っているところの資本の生産力理論は、労働価値説のアンティポット反対物である。この理論は生産要因論——この完膚なきまでの批判は『資本論』で与えられている——の一変形である。

このようにして、ネオ・リカーディアンの価値論理解には内在的な矛盾が現存する。すなわち、一面、価値は、物理的な労働の支出に還元された生産価格としてあらわれるが、他面では、交換価値の独自の形態——ここにおいては物理的数値としての労働時間が計算範疇の資格において利用されるのが精々のところであるにすぎない——としてあらわれる。明らかに論じられているのは、「準労働価値説」、独自の現物労働価値論であるけれども、そこには主要なこと——すなわち生きた労働と対象化された労働、抽象的労働と具体的労働の概念区分はないし、それを欠けば労働価値説が真の科学的内容を失ってしまう、そうしたことがらもないのである。

価値と生産価格の相互関係をめぐる問題点とネオ・リカーディアンの論述

「平均利潤と生産価格の理論は価値論と両立しない」²⁵⁾というボエーム・バベルクの命題は、何十年もの間にわたって、ブルジョア経済学によって、マルクス価値論にたいするかれらの見方の起点命題として、広く利用されている。M・デサイの証言するところによれば、「価値の生産価格への転形という問題点は、今日でも、マルクス価値論にかかわる討論の中核である。」²⁶⁾

したがって、「転形」問題の「解決」をはずしたネオ・リカーディアンふうなマルクスの「復元」は論理的完結を少しもわがものにはできない。このことは、マル

24) M. Morishima, G. Catephores, op. cit., p.24, 29

25) 『カール・マルクスの理論とその批判』(露訳) セント・ペテルブルグ, 1887年, 24頁。

26) M. Desai, op. cit., p.57

クス価値に反対する態度をもって、今日でも公然と否定的立場をとっている論者をも含めて、さまざまな流派の経済学者によってみとめられている²⁷⁾。ポエーム・バベルクばりの仕方によるマルクス価値論への批判は破産したとM・ドップも反論する²⁸⁾。こうした立場を占めるのが森嶋通夫とJ・ケティフォリスであるが、かれらの意見によると、「『資本論』第1巻と第3巻の間には矛盾はない」²⁹⁾。

同種の立言を述べていっこうに差支えないのは、考察されている「問題」の「解決」が真に意味するところが別なものである場合にかぎる。ところが、実際、議論されることがらには、労働価値説を改ざんする新しい、いっそう手のこんだ変型を選び出さそうとする点であって、その変型は、マルクスを「新しく」読み返す一般的な戦術装置に、いっそう完全に応えるものであろう。

この関連でいえば、最近、西側の文献では、マルクスの労働価値説が多要因からなるのだと宣言するいくつかの見解が出現したが³⁰⁾、それは、労働価値説を構造的に分割し、その要素を個々ばらばらに選んでブルジョア経済科学のシステムに統合するのが可能なのだという虚偽の論理的基礎をつくりだしてしまう。それによると、労働価値説がまるで二つの相互に孤立した細目システムから成り立つかのように、つまり一つは労働価格説 (the labour theory of price) が価格の形成過程を規制し、もう一つ、第2は、労働利潤説 (the labour theory of profit) が所得の分配システムと結びついているかのようにみならず、そうした規定がとりわけ提出される。この場合、所与の細目システム間の関数関係は、生産の当事者が商品アゲンティの直接的所有者としてあらわれた単純商品生産の条件の下ではじめて、立証されるのだと論じられもする。これに反して、資本主義の条件の下では、価格形成のシステムは、あたかも生産過程の現物的パラメーターと生産価格との

27) 「マルクスの理論は——と、これに関連してブルジョア経済学史家M・ブローグは書いている——ウィクステード、ポエーム・バベルク、パレートのような古い批評家にもとづいては、とても正当な仕方では評価されえないのである。(M. Blaug, A Methodological Appraisal of Marxian Economics, Oxford, 1980, p.3)。

28) 転形問題に関して、ポエーム・バベルクの挑んだ鋭敏な論争は、——とM・ドップは注記しているのだが、——あまりにも皮相的である。P・スラッフアの分析が価値と生産価格の数量的一致の問題を解決している点をひき合いに出して、ドップは、価値と生産価格が、両者の矛盾にもかかわらず、実際のところ、相互に矛盾しないのだと主張する (M. Dobb, op. cit., pp.158-160)。

29) M. Morishima, G. Catephores, op. cit., p.201

30) 「価値の概念は——とJ・ロビンソンは書いている——その適用の領域に応じて、さまざまな規定づけを求めるものである」(J. Robinson, Contribution to Modern Economics, p.168)。

直接的関連にもとづいて、規制されるかのごとくである。この結果、価値は精々のところ、価格形成の過程から派生した機能を保持するにすぎない。「われわれが価値をまずもって計算しうるのは——とM・ブローグは書いている。——生産過程の現物的特殊化にもとづいて競争の可能となる価格の生起が定められた場合である。」³¹⁾

J・ロビンソンも同種の見解を支持しているが、彼女の理解によると、「マルクス価値論の意味は、これにもとづいて、価格と、実質所持の分配との間の相互関係が表現される点」「収入の公正な相互関係が確定される」場合にだけ、価値が「公正な価格」の形態においてあらわれる点にある³²⁾。みられるように、この解釈では、価値一般は投棄されはしないで、伝来のブルジョア的偽造のうちに残っている³³⁾

価値の分析は、価格形成のシステムには結びついていない新しい平面に移しかえられるが、これによって、人為的に「転形問題」と、それだから『資本論』の第1巻と第3巻の相互関係の「問題」とが取り出されてしまう³⁴⁾

『資本論』第1巻と第3巻の相互関係を改ざんする「新しい」要綱に「理論的基礎」を据える使命をひきうけたのが森嶋通夫とG・ケティフォリスであるが、両人は、戦術的手段として、武装用にネオ・リカーディアンズによってとりあげられた「マルクスにもとづくマルクスの否定」という手段を利用する。かれらは、価値と生産価格の内在的制約性に関して『資本論』において科学的に基礎づけられた規定を無視し、資本制経済の分析にさいしては、価値システムの利用が「マルクスによる経済理論の内的論理」に矛盾するのであって、それ以上でも以下でもないのだと述べる。この提言を動機づけているのは、「資本主義が、この発展の当初から生産価格とかかわっているのだという点である。資本主義と生産価格——これは同伴者である。両者は同時に発生した」ということを、まるでマルクスには起点をなす規定であるかのようにみなすのである。これから、当然、次のことが出てくる。すなわち、「価値の体系は、それが早期に存在して

31) M. Blaug, op. cit., p.18

32) J. Robinson, Contribution to Modern Economics, p.164

33) 「価値モデルの生産価格モデルへの算術的転形過程——と、P・サミュエルソンは書いている——これは原初の価値モデルの否定、このモデルを生産価格モデルによってとりかえていく過程である」(《The Journal of Economic Literature》, No.1, 1974, p.64)。同種の見解は、サミュエルソンによる他の出刊物『経済学』でも、述べられている。(P. Samuelson, Economics, Tokyo, 1976, p.734)。

34) 「ネオ・リカーディアンズの見解にしたがえば——と、B・ファインとL・ハリスは書いている——価格は価値とは無関係に計算されうるからして、価値が価格に転形する効果は、その本質からして、不適切になるだろう」(B. Fine, L. Harris, Reading Capital, Bristol, 1979, p.29)。

いたとしても、資本制生産の衝動的攻撃力によって破壊されなければならない。これは、否定と交替の過程ではあっても、歴史的転形の過程ではない。」さらには、次のような結論もひき出される。すなわち、マルクスの分析システムにおける価値と生産価格は「択一的に別の論理的役目を果たしている」³⁵⁾と。

この言いまわしにもとづいて、森嶋通夫とG・ケティフォリスの両人は、エンゲルスに論戦をいどみ、かれが、『資本論』第3巻の補遺において、価値と生産価格の論理的歴史的な継承関係を、あたかも誤って示そうとこころみたかのようにいうのである。マルクスの観点からは、と両人のいうには、価値の生産価格への転形が可能になるのは、資本の有機的構成が不変な条件の下においてだけである。だが同時に、単純商品生産から資本制生産へと進化するにあたり、有機的構成が変化することを勘案してみると、およそ転形が不可能だということは明らかになるであろうと。

マルクス理念の「真実な」防守者たろうとして、これらの論者は、価値とこの構造的要素の歴史性格に関する規定をまずもってゆがめる。『資本論』第3巻でマルクスは、資本制生産過程を分析しているが、資本制商品生産の条件下では、価値法則の変容が生じるのだが、価値から市場価格への運動をその価値法則は決定づけるのだということを立証してみせた。この変容の本質はどこにあるのかといえ、それは、市場価格が、多かれ少なかれ、価値の適当な表現となる単純商品生産とはちがって、資本制生産の条件の下では、価格と価値の間に、追加的な中間項——つまり生産価格が形成されることにある。この結果、市場価格は、外観上は、歴史的にみてのみならず、本質からいっても、その価格の基礎となる内容とは異った別な内容の表現になるだろう。まさに生産価格のもつこの中間項的位置のために、生産価格を、マルクスは、商品価値の転化形態もしくは不合理な形態と呼んだのである。このようなわけで、語られるのは、価値形態の変容、価格形成過程の垂直的多層性を特徴とする諸段階のそれぞれの順序ではあっても、その機械的否定ではない。この規定を指摘して、マルクスは、D・リカードが価値と生産価格を混同するからには、かれの抽象は十分にふかくはない、というのも、この抽象には、経済諸過程の相互関連を特徴づける中間項には考慮が払われていないからだという点を見とめた。1895年3月11日のW・ゾムバルトへの書簡において、エンゲルスもまた、価格と価値——これはかれが強調したように「非常に奥深くかくされているために、わが経済学者も安んじてその存在を否定できる。」——との間に介在する中間項を価格形成の過程において勘案する必要性に留意するよう促がしたのである³⁶⁾。

35) M. Morishima, G. Catephores, op. cit., p.182-196

36) マ・エ全集, 前掲書, 第39巻, 352頁。

転化形態だけに、生産価格は、その分析に当って、独自の用具の利用を要求する。議論になるのは、すでに生じた諸関係についての表象をそれが直接に形づくられた歴史過程に投影することはみとめられないということ、けだし、そうならば避け難く、形態と内容がすりかえられてしまうからであるということ、この点である。この場合——とマルクスは書いた——「形態形成の現実的過程をさまざまな段階にわたって」理解する必要がある。これに依じて、研究過程では、「発生的にさまざまな形態をひきだし、それとともに、後には、「それを、分析を通して、統一に還元すること」が肝要なのである³⁷⁾

森嶋通夫とG・ケティフォリスの両人は、資本制商品生産の諸関係——これは、単純商品生産の諸関係と比較していっそう複雑であるから、多種多様な転化の形態をもってするほかは、表現されようがない——を分析する弁証法的方法のこうした側面は理解できないでいる。マルクスの方法に在る論理的なものと歴史的なものの相互関連を否定して、かれらは、価値を単純商品生産の要素としてマルクスが『資本論』において使用したのは生産手段の資本制的所有の発生を分析してみせる起点の資格としてだけのことにすぎないのだという新説を基礎づけていこうとするのである³⁸⁾

論理的議論——これにもとづいて価値と生産価格の歴史的機能的相互関連は否定される——としては「歴史性を個別の要素から構造へと移る運動として考えることはできない。歴史性は構造から構造への運動としては考えることはできる³⁹⁾」という規定、これが提示される。ごらんのように、この云い分には、商品生産の諸範疇の歴史性と、これらが社会発展のさまざまな段階にあって果たす相互作用の性格との無理解ぶりが見えみえに明白にあらわれている⁴⁰⁾

資本の産物としての商品から区別された資本の前提としての商品のもつ質的差異——これは資本制生産過程の直接的結果として「あらわれるのが、個別商品ならずして、全

37) マ・エ全集、前掲書、第26巻、第Ⅲ部、526頁。

38) M・ドップもこの立場をとるのだが、かれのいうのには、搾取の問題に向う場合に、マルクスに求められたのは、分析を交換価値と価格の研究からではなく、搾取率と剰余価値率の規定からはじめるようにということであったと (M. Dobb, op. cit., p.148)。

39) M. Morishima, G. Catephores, op. cit., p.201

40) 「1861—1863年の草稿」で商品生産諸範疇の歴史性問題にふれて、マルクスは次のことを強調した。すなわち、かれの分析では、「いっそう初期の生産年代に属する経済的諸範疇が資本制生産方法の基礎の上では、歴史的に特殊な性格をいかに取得することになるかが明確になる」と (マ・エ全集、前掲書、第49巻、45頁、また第47巻、345頁をみよ)。

資本の価値がこれに付加される余剰価値ともども、再生産される商品の全量」なのだという点、ここに存する——を解き明かすことにもとづいて『資本論』では、価値範疇の歴史ぶりが考察されている⁴¹⁾。次いで、個別商品は全商品分量の可除部分としてはじめて考察できる。これに応じて、価値の内在的特性も変化する。「いまでは、個別の独自の商品に投下された労働量——それは多くの場合、まったく計算できないだろうし、それはまた、一つの商品には、もう一つの商品よりも、量としては、いっそう多いことがありうるだろう——ではもうすでになく、全体労働、この全体労働のそれに相当した部分、全体価値を生産物量で割ってえられる平均労働こそが個別生産物の価値を決定づけ、それを商品として構成するのである」⁴²⁾。留意すべきことは、この重要なマルクスの方法論的規定のうちで、問題となっているのは、資本制的に生産された商品の価値数値を決定する手法についてだけでなく、その実体的基礎に関してでもあるという点にある。

したがって、『資本論』のシステムでは、資本制的に生産された商品の価値構造は成熟度において質を異にした価値要素から成るのではないし、生産価格も単純商品生産の特性を反映する要素としての価値に相関するのではなく、その質的に新しく、いっそう展開をとげた歴史形態における価値——つまり資本制的に生産された価値と相関するのである。この関連において明白なことは、生産価格を（単純商品生産の要素としての）もっとも簡単な形態の価値と比較較量するいかなる企画も、これらの範疇とは別な他の相互関連を想像するところみとも同程度に、マルクス見解の俗流化になるという点である。「…商品としての商品に真なる法則は、商品が資本として、もしくは、資本の産物として、姿をあらわしはじめる場合にかぎり、その商品には非真実となる」⁴³⁾——と強調して、マルクスは、リカード価値論の首尾一貫しない要素を指摘したが、この要素こそ、ブルジョア経済思想のネオ・リカーディアン一派によって、完全に把握されているし再生産されてもいる。

現代ブルジョア「マルクス学」^{マルクソロギア}で広く使用されている手続にして、マルクス経済理論の改ざん手続きの一つとなっているのが科学とイデオロギーを「分離する」実証主義的原則の適用である。同じような企画は、多くの場合、その起源をJ・シュムペーターからうけとり発足するのだが、かれはといえば、経済理論のイデオロギー的局面を「分析以前の要素」だと宣言し、労働価値説をこの一つに^{かぞ}数えたのである。このことは、価値論を固有な科学的分析の「異種な要素」に算入するための論理的基礎をつくり出してき

41) マ・エ全集、前掲書、第26巻、第Ⅲ部、112 - 113頁。

42) マ・エ全集、前掲書、113頁。

43) マ・エ全集、前掲書、70頁。

たのである。

同時に、最近、何年間かのネオ・リカーディアンの文献では、一定の修正をほどこして、いくつかの場合、いまの問題に関して、J・シュムペーターの理論装置をも再検討しようとした企画がとりあげられている。J・シュムペーターの見解は——とM・ドゥブは書いている——「もはや支持できない。なぜなら、同見解は経済理論を、形式的構造だけを研究する範囲に限定してしまうからである」⁴⁴⁾ 大して期待のできるようには思えない転向のもつ意味は、「マルクス復興」の現象がその基礎において反映するものは「脱イデオロギー化」ではなく、ブルジョア経済科学の政治化、その「再イデオロギー化」であることを勘案してみるならば、分明になって理解できるだろう。この転向のうちに、価値の生産価格への転形「問題」をめぐる解釈における、はたまた、とりわけ労働価値説のブルジョア的復権における「新しい」力点の真実な動機を解明する鍵が介在している。

搾取問題をネオ・リカーディアンズが検討する場合、社会階級的なイデオロギーの志向はまったくもって明白にあらわれる。この問題にたいしてブルジョア経済学が払う留意の事実それ自体は積極的契機ではある。この場合、考慮すべきことは、価値を現物的に論じていくさいにそれが客観的に前提するものとは、賃金を必要生産物の形態として考えている点にある。ヴェ・ドミトリエフとP・スラフファの方程式及び森嶋通夫の考え方では、賃金は人間に典型的な欲求を充足するのに利用される使用価値の一定組成という形であらわれる。これに関連して、次のような規定に注目してみるのが大切である。すなわち、最近に公刊されたネオ・リカーディアンズの作品には、労働力という商品に関するマルクスの規定——それは以前にはいつも「経済的に無意味」だと宣告されていた——の正当性がみとめられているばかりではなく、この概念を基礎づけるに当たって、リカードの価値論についてマルクスが肝心な前進を果たしてのけたのだと、強調されてもしている⁴⁵⁾。

ネオ・リカーディアンの構想では、搾取は必要生産物にたいする剰余生産物の関係として論ぜられるし、しかも、これは、かれらが労働価値説に従っているかのごとき幻想をつくりあげる。しかしながら、この幻想は、いまの場合、剰余生産物が生きた労働の直接的な結果としてではなく、生きた労働と対象化された労働の具体的支出の一定価値

44) M. Dobb, op. cit., p.36

45) J. Robinson, Contribution to Modern Economics, p.183, M. Morishima, G. Catephores, op. cit., p.48

として考察されている点を勘案してみると、跡方もなく消えてしまう⁴⁶⁾ この結果、搾取の社会的意味合いは、ネオ・リカーディアン⁴⁶⁾の論述では、まったくもってゆがめられる。第1に搾取は経済成長の積極的な要因としてあらわれるし、第2には、搾取は、階級間の諸関係、生産手段の私有制覇に結びつかない現象だと想定されもする。これに応じて、搾取者を欠く搾取論が構築されることになるが、この搾取論はまるで資本制経済に内在するにとどまらず、社会主義経済にも固有であるかのごとくである。「搾取についての規定は——と森嶋通夫とG・ケティフォリスは書いている——生産手段の社会有にもとづく体制——これは、剰余生産物の一部蓄積という点では資本制経済と類似している——にも適用できる⁴⁷⁾

社会主義の下では搾取が生産力増加の必要な属性だということを、何とか証明しようとして、森嶋通夫とG・ケティフォリスは、この点でも、自分に固有な捏造をマルクスの権威によって確認しようと努め、乱暴にも、マルクスの見解を改ざんする。これは何よりもまず、かれの作品からとり出されはするが、しかしながら、その社会的内容については、それは比較できない方程式の機械的な接合にもとづいておこなわれる。

$$\frac{\text{剰余価値}}{\text{労働力価値}} ; \frac{\text{剰余価値}}{\text{必要労働}} ; \frac{\text{不払労働}}{\text{支払労働}}$$

前二者の方程式が資本制経済を特徴づけ、第三は、社会主義経済を特徴づけるとしてこれを扱ったところに、二つの間に同等性の兆候^{ズナク}を提示し、これらの著者は、剰余生産物は資本主義の下では搾取階級によって返却無用でよこどりされるのにたいして、社会主義の条件では、剰余生産物が、完全に、全体の社会主義社会と個別的に各社会成員との利益のために使用されるのだという点には、故意に考慮を払わないのである。

こうした方向における第2歩は、社会主義に搾取がありうるのみならず、不可避でもあるという提言を確認することに結びついている。『ゴータ綱領批判』において——とこれら同著者は書いている——マルクスは、生産手段の社会有が社会主義改革の当初に

46) 森嶋通夫とG・ケティフォリスの著書では、資本制搾取率(e)は次の範式で表現される。

$$e = \frac{\text{剰余価値}}{\text{必要労働}} = \frac{\text{実際の労働支出} - \text{必要労働}}{\text{必要労働}}$$

ただし、実際の労働支出は、生きた労働と対象化された労働の総支出として描かれている(M. Morishima, G. Catephores, op. cit., p.74)。

47) M. Morishima, G. Catephores, op. cit., p.20

確立されなければならない、その後になってのみはじめて、生産力の完全な発展が、したがって社会主義の完全な勝利が生じなければならないのだということから発足する。ここからして、社会主義の社会は、その性質上、剰余生産物を順調にするために、必要生産物の削減を前提とするかのごとくである⁴⁸⁾。

同様な捏造の目算は明白である。すなわち、虚偽の論理的前提の上に構築されたいわゆる「搾取者なき搾取」という考え方は、現実の社会主義を傷つけて評判を落とし、人をひきつける魅力を少なくするために、ブルジョア「研究者」には必要不可欠なものである。資本制経済についていえば、ここではネオ・リカーディアンズの努力は矛盾した道程をたどっている。しかも、マルクスの権威に立脚して、かれらは資本主義を免罪しようとする。これに関連して、J・ロビンソンが証明をこころみようとする主要な提言とは次の点にある。すなわち、マルクスが示したのは、資本制的な「ゲーム原則」が蓄積と技術的進歩を刺激すること、労働者の搾取は蓄積のためにおこなわれるのであって、資本家たちによる個人的消費のためではないこと、蓄積がいっそう急速なテンポで増加するならば、実質賃金の水準は高まることなどの諸点である。これにもとづいて女史は次のように結論を下す。「すなわち、資本家たちが…マルクスの規定を追及するならば、社会主義の必要性はまったくなくなってしまう⁴⁹⁾」と。この立言は、同文節の著者にして、長年間にわたる学問的活動において「マルクスにたよってマルクスを反駁し」ようとする著者の論理的な積極ぶりの目的を、否が上にも、明確に示している。

1913年レーニンの有名な論文『カール・マルクス学説の歴史的運命』において、かれは、「マルクス主義の理論的勝利が、その敵を強制して、マルクス主義者に着替えせしめる、こういうのが歴史の弁証法である⁵⁰⁾」と書いた。ネオ・リカーディアン一派の経済学者によって企画される、「新しい読み方」によるマルクス労働価値説のこころみ、その個々の要素をブルジョア科学の構造に統合するこころみ——これはいまのレーニンが与えた規定を確証づける一角である。同時に、マルクス経済学の所説を改ざんする新

48) 「一定の歴史的局面を考慮して、マルクスとエンゲルスは、われわれの社会主義的搾取と名づけて提示した現象を確定できたであろう。とはいえ、かれら自身は、分析の純粋に論理的局面を考慮して、どこにもこの提言を利用しなかった」(M. Morishima, *G. Catephores*, op. cit., p.64)。

49) J. Robinson, *Contribution to Modern Economics*, p.70

50) マ・エ全集、前掲書、第3巻、3頁。

しい手順は「和解」の旗の下に、おこなわれるにせよ、客観的には、その活力、そのとめども尽きせぬ創造的可能性をうつしだしている。

〔後記〕本稿はガルチンスキーの一論文、「マルクスの価値論とこれを改ざんする現代ネオ・リカーディアン」(「経済の諸問題」[1983年第3号])の全訳である。近代経済学にたいして、食わず嫌いの超絶的批判とか、無関心な黙殺とかのかつての現代ロシアの経済学界に多少とも特有な方法にかかわって、批判の客体となる文献に積極的にはいりこみ、内面的になじんで点検する態度は、科学の発展の上からは歓迎されるべきであり、最近のソビエト文献ではもっともっと多くなることが望みをこめて期待される。ガルチンスキーの論策はこの方向の一つとして、注目をしてしかるべきだろう。

なお、マルクス・エンゲルスの見解、ロビンソン、ボエーム、シュムペーターその他の論者の叙述は、大部分は邦訳されているが、あまりにも周知のことなので、邦訳本をいちいちページを挙げて借用しなかった。

*

*

*

〔訳者付言〕ブルジョア経済学が無条件に制覇を誇った年代に、科学の系譜としての古典経済学とともに、これと対立した、生存には客観的に必然の性格は免がれえないもう一つの没科学的系譜として、俗流経済学を含む経済学弁護論が介在していた。いずれの系譜であろうと、両者の間の目立った反目を抑えて、ともに経済学の資格を与えてきた資本関係の気鋭に充ちた新進期間も、当然ながら、永遠につづくはずはなく、資本が内在矛盾を表面化し地金を露わにして、この維持にはなりふりかまわずふるまいはじめるにしたがって、ブルジョア経済学のうちに何とか一括されていた内部の反目は、こんどは、無条件に発現し、外部に姿をありのまま、鮮明に露呈して、科学上の真贋を、無遠慮に区分するに至った。とくに、科学はいっそう科学的な方向に、非科学はいっそう没科学に向い、それぞれ分化して、相互に反対の軌跡をかなりスピーディにたどっていった。この間、ほぼ二百年のことである。

ブルジョア科学としての古典経済学がそれらしく科学として自己を完結する過程には、それに伴う付随条件というか、スプートニクというか、ともかく脱落と落伍の摩擦事件も必然的であった。これは科学が前進し絶頂をきわめる代価^{プライス}である。発展は淘汰の上に咲き、栄誉は犠牲の上に輝く。そのようなものとして、リカード学派の解体は表象できる。だが、これを部分のフリクションとして科学が進むとき、リカードの良心に伏在した科学の真実、つまり人びと相互の関係、スミス以来この

かたの生産関係は、かれらの手でいっそう徹底化して展開をとげ、かれらが作った物件に制約されながらも、改造をもふくめてこれを培養し再生する行動、生起に制約される活動、歴史関係、社会の行為これにまで高まって、かれらは、正当にも、これを経済学の研究対象に位置づけてきた。古典経済学が分配（階級）関係とか生産関係とかの形で分析の客体としてきた経済学の研究内容は、方法自覚的に、人間と同義の**人びと**の感性的実践、社会的制約に条件づけられた決定づけの運動、歴史行為、かれらの社会的活動に鑄直された。巨匠マルクスの手によってである。

これを補足して、他面、没科学の方向もずっとふかまり、曖昧な対物関係は、きわめて抽象的に無力な観想の個人と物財との関係に純化をとげ、社会的内容を抹消して、歴史行為も清算してしまう始末である。

科学がたどった相互に反対の二つの方向は、このどんずまりの果てに、私有の現実関係をとらえる理論的模写としてのマルクスによる労働価値説と、空疎な個人と無規定の財を直面させて個人の覚える印象的な有用性の折出ともいってよい効用理論との二つとなって具象的にあらわれた。ほぼ前世紀70年代のことであり、スミス、ベンザムからほぼ百年、ペティから二百年の出来事であった。1870年代には、ブルジョア科学は、マルクス経済学と、ブルジョア弁護論、濃縮していえば、労働価値説と限界効用理論、この二つに分化し、おのおの自立した部門を形成するに至った。

われわれは、マルクスの労働価値説と限界効用価値論の二つが、生存に関しては、歴史的に双生児であって、各階級内に介在する単位間平等の関係にもとづいて、生産力の増加を吸いこんでは、それを価値減少として吐き出し、剰余価値の再生産を図る歴史の作業において、資本制経済が多少とも進歩の成果を伴って、一時期は傍若無人にふるまって憚ることのなかった社会的行為、つまり自由競争の貫徹し切った社会関係に、二つの価値論が共通のルーツ、培養基盤を有していたことを、かつてどこかで指摘したことがある。いうまでもなく、生える社会土壤の共通性は、単位、時点、数値など限界で定まるという規定ににじみ出て鮮明である。

主観価値でいえば、それが効用一般ではなく、目盛りの最終条件に拘束された逡減する効用によって定まるという見解は、従来の効用を含めて主観価値の理論とはちがい、そこから一定の飛躍をとげた新しい地平の価値論だと目されてきた。この斬新ぶりのゆえに、それは「革限界命」の事件とすら名づけられてきた。この「革命」ぶりにおいて、たしかに、これは従来の学派、他の流派と区分づけられうる。他方では、マルクスの労働価値説でも、古典経済学がこれにつまづきこだわりつづけて、ついに脱却に成功しなかったところの、それがために、結局は撞着と行詰ま

りに追いこまれざるをえなかったところの、数値を定めるさいに投下した時点の労働量による価値の決定づけ、いってみれば歴史価値決定とこれとは判然と訣別し、これを突破して、過去を現在にひきつけたいわば再生産価値によって、無差別に価値を決定しようとする新しい考え方が介在している。それは、時間的経過において、現在か、もしくはそれにもっとも近い、ともかく最後の時点に支出する労働量によって価値は定まるのだとする理解である。数量決定の相異なる原則にはみえても、これは、私有をどうとりあつかい、これをいかにみすえるかの根本的な歴史認識の差異が細目部分に再生しここにおいて露出した形態である。しかし、二つの価値論がともに、決定の基礎を、何らかの事項にかかわった「限界」に保有するのはたしかである。

統一された共通の外皮にまつわりつく隙間から、両者の異色な性格、ときにはまったく反目する社会的含意が、ちらほらと地金を露出し、本性の顔をほころばせはじめ、これは当然であろう。

物象力としてあらわれる人びとの分断関係こそマルクスには価値のことだから、労働説では、価値とは性質上、かれらを強いて制圧する苦役の、それゆえにできれば避けたい重荷の何ものかを意味する。これに反して、限界効用には、反対に、価値とは、かれらの求めて努力する有用な、また入手が努力に値する貴重な何ものかを意味する。また限界性が定住する作用領域は両者、相異って、一つは、空間内の範囲区分、領域単位であるのにたいして、もう一つは時間経過の限界点である。また、客体としての価値は、一つには、人びとに制圧を加えるのに、他はかれらに享樂の財貨を与える。価値とかかわる主体も、一つは、人びとといっても、その実証として社会を培養する枢要の位置にある歴史行為の担い手であるのに、もう一つでは、反対に、孤立して無力な抽象的個人である。一つには、労働を支出するのは歴史行為を担う労働者であり、もう一つでは効用を感じるのは抽象的個人である。価値が少ないほうが社会の前進からして好ましい労働価値説にたいして、それが多いのを、社会厚生上は求めるのが効用説である。だから、苦洪の最小限が価値を定めるとみることは進歩と解放の最大限となる時点が価値基準となるというにひとしく、これを受容するのが労働説である。労働価値説は進歩と不可分にかかわっている。これに反して、希求の最小限、したがって、重荷と困難が最大になる条件に価値基準をみるのが限界効用説である。そうだとすると、この説は、社会の低迷と愚昧にふかくかかわっている。こうしたいろいろな相異を、二つの価値に、これが背負う社会経済的合意として、つきとめみつけださねばならない。

とくに、この文脈で指摘を怠れないのは次の点である。すなわち、限界効用価値説においては限界的に最小の劣位条件が「効用」価値の決定基準になるというのだが、これこそ、価値インフレーションを正当化し、社会を風化する方向をみとめ、この第一歩をふみださせることを許容するために、期せずして、独占の成立にイデオロギーの側から道を開くのであり、この見解が具有する社会階級的性質である。限界とは、資本のどんづまり、限界を意味するのみならず、低劣の限界単位をも下請として含む独占的行為の限界志向的規律をもシンボライズする。これにたいして、マルクスの所説のほうは、最小の価値が決定基準になるのだから、私有内前進の行為、自由競争に立脚した平均原則が特有である。このようにして、限界は資本単位の不平等を、平均はその平等を、それぞれ意味するシンボリックな形容語だといえるだろうし、そういっても大過はないだろう。

二つの価値論は、歴史的に共伴の事象であって、けっして偶然の同時生起ではないのだが、この共伴の構造は、労働価値説にとって、資本の限界、歴史的臨終をみぬいて、古典経済学の水準をふみこえた再生産価値論が、ブルジョア経済学の墓掘人として末尾に定住するのに、限界効用価値説は、反対に、この終点を始点にすえかえて、むしろ臨終を避けるための資本による工夫ともいべき独占の位階を任務とした歴史の発端において独占を正当化したり飾ったりする一つの観念的表明となる点にある。自由競争の終焉期を集約するのがマルクスの労働価値説に特有な再生産価値規定であったが、この同時代を独占の方向で分有し、むしろ、反対に、独占の発端を告知するのがもう一つの限界効用説である。マルクス価値論の終わったところを、逆に、起点として、これから出発するのが限界効用説であった。同時代の所産だといっても、マルクスの末尾と限界効用説の首頭が同一時点を共有する作法の共伴的な構造において、両者は有機的に分ち難く結びつけられる。

同一の社会的現実を、同一時点において、ともかく分析の対象に据え、とりあげながらも、一体、どうして、このような隔絶した相異があるのだろうか。

効用説とても、思いつき、幻覚を相手にし観念化しているはずもなく、社会にかかわる何らかの現象をとりあげているのはたしかであって、この点では、私有の運動する仕組を濃縮してうつしとっている労働価値説とは完全に共通であり、この共通性が形式上の最終 (final) 性にもにじみだしているわけだが、この点を、われわれは知った。だが、しかし、それでは、一体、二つはどこをいかなる仕方で描いているのか、これが次に問題となる。

方法論としては、学説はがいして、一定の経済関係 (行為) とこれをうつしとる

個人体の知覚力能との相互作用によるが、しかし、二つは独立変数的に無縁なものではない。何を模写の客体とするかは模写する主体の質性（力能）がいかなるものかにも確実に連動して、これを決定づける。社会のどこをとりあげるかによって、研究者の質性が何であり、どの程度かも定まる。何を对象的に作るかによって、その個体が何であるかが決定づけられる。対象を変革することによって、人びとは自己を変革する。けだし、客体的につくるものの中には、個性の力能もおのずと含まれるからだろう。

ところで、社会の仕組は、思い切ってシエマ化するというならば、人びと相互の織りなす活動関係と、かれらの所産ながら、これを制約づける歴史的条件とかれらとの関係、者内相互関係と対物関係、むつかしく慣用術語でいうと、生産関係と生産力、この二つの関係、二つの支柱から成りたつ。人びとを行為の担い手とする生産関（間）係は、全体として生産力にたいして、これをいまいちど自分の実証をとげる外皮、担い手たらしめながら、社会を現実的に組成する。生産力は、人びとを一環に有機的に包むから、この中には模写と知覚の個体力能も当然に含まれる。人間を間において、生産と産において、感性の実践を実践において、社会を生産関係において、歴史行為を行為においてなど、初動と作動の統一体を作動において、この側から一貫してとらえる科学の方法は、人びとの実証として、社会を培養するのにもっとも中枢の、もっとも煮えたぎる社会行為に、研究の対象を定めるのだが、この行為が、制約条件として歴史をも下剋上するのに、けっして例外のないことを方法自覚的にみとめることによって、研究対象の私有関係が相対的に過渡性をもつ性質をみぬけるが、これによって、科学度は徹底するし、絶頂をきわめて完結をみる。この場合、研究対象は、社会革命をも含む社会行為であり、これをうけとめる研究個性は、私有の命運を顧慮することなく、むしろこの歴史的相対性を自覚して視点に体现し、行為の内在論理を法則としてうつしとる仕事において、この行為に分業的に参画する観念財の生産者大衆である。対象と個体の相互関係から社会の理論、歴史の解剖学が成立する。こうした社会内局面の相似形的なひな形が、ほかでもなく、労働価値説なのである。労働価値説には、自分、個体をも含めて、社会制度も労働によって変革できるだろうし、社会の一般的条件による加圧もこの労働次第によって軽減できたり重くもなりもするだろう、そうした人間定在のありのままが濃縮してうつしだされているのである。われわれが、これを目して、労働価値説を私有＝人間の濃縮した一般範式と呼んだゆえんである。

社会関係が運動として、もっともふくらみ活動性の最大にみなぎる歴史の培養領

域に分析のメスをいれて、ここでの仕組を濃縮して、大きくは歴史行為、または感性の実践、小さくは拘束された労働、価値の重みを背負う労働、こうしただぶった作法においてうつしだしたのが労働価値説だとすると、反対に逆の方向に純化し、歴史関係を歴史に、社会行為を人びとにのみ吸収し、この人びとをさらに孤立した抽象的な個体に還元してしまい、社会の運動の作法からはいよいよ無力な局面へと、個人を逃避させ、他方では、人びとを含む物象力を、力という支配の形態規定をはぎとって、個々の物財に還元し、これを研究客体とするのが効用価値説の成立する前提である。こうして個人が同じくこうした社会局面をうつしとって、これを合理化する認識のスタイルも出来上る。

労働によって価値を反目しながら培養し、これをはねどけて償うというのではなくて、反対に個人にのしかかる物財の支配力を効用としてとけとめ、この効用を価値とするのが一般に効用価値説であり、これを人びとの孤立無援の極限でとらえたのがほかならぬ限界効用説である。価値を労働によって反撃する下剋上の仕組を反映した労働価値説という正常な私有定在の模写のかわりに、物財の支配力（購買力）を効用として、無力にもうけとめ、ご無理ご尤もとして、この効用を価値として定立するのが効用価値説である。支配にたいする下剋上ぶくみの反目関係を生きいき体化する労働価値説にたいして、むしろ、支配には忠実に服するというのが効用説の特徴である。反撃するか、服従するか、これを決定づける戦略因は、二つの価値論では、協働をおのずと含む（結合）労働と、「限界」にあらわされた人びとの孤立分断の個人状態にある。服従するが、なお同時に下剋上もする人間定在の真実な姿からそれて、下剋上を忘れたかのごとくに、服従しっぱなしの仮象、非真実を合理化し、この服従を人びとの個別に限界的な孤立分断で支える方向を合理化したのが限界効用説であろう。孤立に連合が、分断に結合が交差する、奇異ながらも、生きた矛盾に在る人間定在を廉直にうつしとっていない点では、それは、科学認識としては、正しくないのみならず、物象力の支配と、これによる人びとの服従を永遠化する意味合いからも、一つの弁護論である。ともかく、実践を欠いた感性に一面化した無力な個人と、同じく物象力をこの担い手としての表皮に還元した個別的な物財との間に成立する動物的な相互感覚の作用にかかわる抽象的印象として、限界効用説は考えられる。労働価値説の裏側に回った、人間定在を非在化する極限の観念として、限界効用説は、もちろん科学権は欠くが、しかし、労働説を補足するもう一つの変型として、生存権を求め主張するには、けっして欠格者ではない。けだし、それは、自然発生的な研究者の表象をさしづめ根だやしにできない以上、資

本制経済の上に生^はえる必然的な観念的産物だからである。

労働によって、価値を成立せしめると考える社会的含意は、労働が、価値の培養因であるとともに、価値破碎の反撃因でもあり、価値支配の原因であるとともに、価値破壊の動因でもあるといったふうに、二者闘争的にとらえることにほかならないが、これにたいして培養因に一面化して、もう一つを捨象し、人びとの孤立分断の極限化によってこれを永劫化するのが効用による価値の決定づけである。したがって、マルクスによる労働価値説の一面、本質面ともいうべき労働による価値培養の事象を一手にひきうけて、これから労働をとり消して加工し、価値による個人の全面的屈服を命題化し、これを独立の教義に拡大して事業化するのがほかでもなく限界効用価値説だといえるかも知れない。この意味では、限界効用説は、労働価値説の一般的に歪曲された器官的分身だということ、これがうつしだす社会関係の局面と関連させてとらえる以上は、前者は後者の一分岐にすぎないこと、こういう点もかなり分明になるだろう。

二つは、択一化した方向なり過程、すなわち、一つには、私有を守るために、独占を拵えて支配の歴史期間を稼いで延命を図かること、もう一つには自由競争を反独占的に作動させ、この結果が私有の破碎となってあらわれようとも、なおも何ら顧慮せず歴史の直進を目ざすこと、この二つの異質な方向を歴史的に促進すべき任務として体化し、この任務を、それぞれの社会経済的意味合いとして具有しているように思われる。

人びとの意識とか個体とかは置けっ放りに無関係にして置いてかれらの行為だけを吸収しながら自立的に運動する社会の客観的組成をとらえる業務において、いつかは生じる科学上の再発見、科学を求める抗し難い志向と相並んで、これにきっかけを与えたり、これを促進したりするのに、一つの直接的要因として、すでに成立している独占関係、制覇を誇る独占行為の相対的流動化も、みのがすわけにはゆかない。独占が独占でいられるためには、また資本が資本でありつづけるためにも、この事情は肝要にして不可避である。生産力の社会進歩への還元として、価値減少なり非独占化はたとい率直な姿では望めずとも、何らかの作法による独占度の相対的緩和の実現として資本の不可欠な現代的生存条件である。これこそ、単位間とくに独占主間の競争を比較的に激しくし、反目を高めることにほかならない。資本の不正に徒勞な延命は独占によるが、独占の延命は、かえって、独占を何か非独占のほうに向って、相対的に流動化することによってはじめて確保できる。これは論理的にもそうなるはずだし、実際、アメリカとか西欧にみられるように、また

日本でもそうになっている。相対的な社会進歩を生産してはじめて、一つの体制がともかく、存在理由を手にいれ、組織づけを歴史から委かされるのだが、風化内非風化として、こうした特異な進歩と同義の独占関係の弛緩は、資本が資本につづく以上、不可避である。この流動化を内蔵しつつける基礎過程の地殻変動は、この上に生えてきた観念的産物、経済理論、とくに価値論にも変化を与えずにはおかない。J・M・ケインズにおいて完結に近いほど充実とみてきた新古典経済学に特有な限界分析方法論にも、この変動が無遠慮にひびをいれかねないし、実際、ひびをいれてきたのは、こうした相互連動の結末であり、この感覚的一角であるとみてよいだろう。本文中にガルチンスキーもいうように、目下のところ、限界分析からの脱出、この方法への造反がはじまっているのである。

限界効用価値説から、主観的形而上学として、また実証主義に反する資質として、効用属性がとり払われて、限界代替率だけが残った史実の経過は誰しもご案内のところだが、この代替率からも脱出して、限界原理一般の拘束から免がれ、さらには対物関係の一面化からも解放されようとする息吹が、最近とみに、近代理論に胎動しはじめ、一部は学界市場で受け盛況をきわめる有様でさえある。それは、一面では、たしかに前進的な出来事である。だが、他面、一方的前進の姿をとらずに、解決を前方で図らずに、社会関係にはけっして許されるはずもない観念内でのみ暫くの間は容認もされるところの、もと来た道をひき返しリカードに復帰する姿をとって、この解放の息吹き、脱出行為はおこなわれがちである。この事情をガルチンスキーは、ネオ・リカーディアンズによる新古典派の克服と呼ぶが、かれらはこうした空疎な撤退だけで満足しない。リカードをリカードらしく徹底し科学的に完成したマルクス個人の画期の仕事を、こんどは道をひき返すかのごとく、逆流させて、かれらは、徒労にも、マルクスをリカード化する論理的作業を、新古典派克服の営為に重ねておこなおうとし、「克服」がマルクスのリカードへのひき戻し作業を通してしか実現できないかのごとくふるまうのである。新古典経済学のリカードへの復帰と解消がリカードから出たはずのマルクスを、再びリカードへひき戻す逆流をひきこみ、巻き添えにして、愚劣にも、歴史の歯車を反転させている。このために、科学上の真贋を区分するのに役だってきた、経済学の二分化の道程が再びリカードに向って合流し、一つに転化してしまうかのような作業を、かれらは果たするのであるが、このことは、かれらの観念内の加工、構想の事項であり、かれらの思想的低迷と科学上の不誠実ぶりを曝けだすことであっても、けっしてマルクスの理論を低めないし、また学史の前進軌道を損傷することには少しもならない。ただ、

かれらの営為を無駄骨、徒勞な仕事とするだけのことである。しかし、新古典派のリカード化以上に、マルクスをリカード化する傾向は強まり、一つのモードとさえなつて、経済理論の領域のみならず、経済学史の部門にも侵出し横行してきた。この事情に関連して、ネオ・リカーディアンの原型として、いち早く仕事を果たしていたスラッファもおのずと注目を集め、この先駆性が評価されるようになっている。マルクスのリカード化という後退現象を精密化の口実の下に追求するアプローチもわが国には少なくないし、またこれを担う研究者としてスラッファ学徒 (Sraffians) も案外と多い。

だが、この現象が、モードながらも、科学上は確実に、一つの退歩事象であり低迷の出来事であるのは自明にして、いうまでもないにしても、マルクスに固有な価値論の通俗的理解、形而上学的要素と誤解される不満を残すようなマルクス解釈の作法が、限界効用説とマルクスの価値説を無理心中させ、両者を消してリカードへ復帰するネオ・リカーディアンの作業方向をよびおこし、これを必然化してきたし、またはこの作業を果たすことによって、埋められるのだととりちがえさせる隙を与えてきた、こういう節もないとはいえない。これはマルクスの通俗化が招いたいらざるマルクス批判である。ネオ・リカーディアンを群生させるいずれの原因も、それが直接に発現するきっかけは独占関係によって与えられる。独占関係の流動化がもたらす資本関係の変化を、リカードの限界を突破して消化したマルクスによる価値論のいま一段と^{ラディカル}徹底した展開という過程に実を結ばせ、アップ・トゥ・デートに刈り取るかわりに、まるで逆に、マルクスのリカード化という愚にもつかない代価を支払って、限界分析方法論を片づけ帳消しにしようとする論者が一派を形成して、いまでは群居はおろか、闊歩しはじめた。その名がネオ・リカーディアンの一派だというわけである。

客観的経済現象の組成に内在した因果関係に適合し、これをうつしだすがために、うつしだそうとすればするほど、客体に照応して範疇・概念の正当な位階的編成を科学として構築する必要があるが、こうするかわりに、かれらは、機械的に、あらゆる変数がある変数に依存し、逆もまた真なりといった、現象の運動する客観的因果にはおよそ無関係な没科学の水平主義としての非限界主義的均衡理論を生産しはじめた。それを、場合によって、論者は、現代マルクス製と称することもある。とんでもない話である。人間を解放するためには、かれらの歴史行為が必要不可欠だが、これにさきだつて、行為にふさわしく、また指針をも手にいれるために、まづもって科学は、人びとの相互間を平等関係で色どる組織づけとともに、これを支

える礎石となる内在法則，客観的な運動の論理，組織の仕組などを正しく理解する要求を執拗に提示して一步も譲らない。科学としての社会の解剖に不可欠なのは，社会の作動と因果に順応して，これをそのまま反映する以上，範疇・概念間の平等関係ならずして，位階的編成である。人びとの解放のために歴史行為の内部成員として，かれらの果たす組織では，相互の平等関係を強く求める科学は，このための指針を入手する理論の構築においては，かえって反対に，手のひらを返すように現象の構成因をそのままうつしとって，範疇・概念のヒエラルヒーを与えてみせねばならない。解放行為において，人びとの平等関係をこよなく愛する科学は，この前提条件として，客観的現象をうつしだす範疇・概を構成する理論作業では，うってかわって不平等としての位階を好むのである。人びとの平等関係と範疇の位階配置をともに，科学は追い求めるわけである。

不幸にして，現在のところ，大まかにいって，経済学にはリカードをいっそうマルクス化する作業を目ざすものの，舌足らずに終わっている「ラディカル経済学」と，これを補足して，逆に，マルクスをリカード化するネオ・リカーディアンズ，この二つの現代的営為があり二方向に分化を急いでいるように思われる。ともに，社会行為と経済学体系をステレオタイプ化するドグマティズムに敢然と抵抗する点では，それなりの歴史にたいする情熱と，多少の科学的良心はある。しかし，情熱と良心だけでは科学は成り立たない。客観的に内的論理の鼓動を聞きとる廉直なもう一つの良心，さめた社会的知性が必要不可欠である。こうした良心に恵まれずこうした知性に不敏なために，二つの現代派は，たしかに資本にたいして現状を告発したり，警鐘をうち鳴したりする社会的覚醒の機能はもっているけれども，いずれも心ならずも，小児病的反応としてしか自己主張しえず，さらには私有を防守する点でも，自覚の有無はともかく，共通な意識の拘束からは脱していない。マルクス経済理論にかかわった現代の，いずれも奇形としか評定しようのない二つの方向は，かつてリカードを，資本関係の危機に直面して，これに順応させるがために，文言上の化石化，命題の死蔵，提言の凍結によって，不本意にもリカード学派を瓦壊にみちびいた解体一派並びに，リカード派社会主義を含めてプルドン主義と，もう一つ，リカードをマルサス化し，弁護論に改装するなり換骨奪胎するなりして，これと俗流化したプソイド・リカーディアン一派，この二つの苦渋にみちた生なましい史例と流派に先鞭をつけられた現代の事例だと考えることができるだろう。

価値論を新しい現象，たとえば独占関係に適用して実証する作業においても，限界効用説をしぼませ，これからの脱却を図かりはするものの，理論と政策づけに

よって動かそうとされる客観的な内在理論の側からいえば、動く方向に動かす社会的意味合いを有する労働価値説の展開からは、惜しくも撤退し、リカードに復帰するか、少なくともマルクスの均衡論化を図かるネオ・リカーディアンズの方角づけに、マルクス価値説の通俗的解説もあずかって力のあった有力な原因となっていることを別なところで指摘して、われわれは、この原因が論者に批判の矢を与えさせうちこませる隙を供して、論理矛盾の宣伝を公開する舞台を思わず与えるはめになったことをも付言しておいた。古くはボエーム・バベルク、K・シュミット、新しくはJ・A・シュペーター、J・ロビンソンなどが批判者としてあらわれた。こうした批判が供給される分析局面、理論部門の一つがほかでもなく、価値と生産価格の林立のごとくみえるいわゆる「転形問題」の領域である。ここでは立ちいって言及するわけにはゆかないが、社会的再分配としてあらわれる剰余価値の転形は、価値減少、物価の下落も、もう一つの剰余価値だという視点を加えて、範式を再考すると、そうではない場合よりも、また以前よりも、たしかにことからは、随分とちがってみえてくるのではないかと思われる。しばしば忘れ去られて(neglected)いるものの、価値減少も剰余価値だというのはマルクスに基本的な考え方でもある。

ガルチンスキーの同論文はたしかに問題がないわけではなく、したがって内容上、反論をよびおこすだろうけれども、マルクスのリカード化という現代の警戒すべき風潮に釘さし、流れに流されず、これに抗して流れをとめ反転させようとする科学防守を目ざした事象の一環だとみると、いくつかの起点を副次の検討課題に回わし内部事情にとどめて、なお全体としては、積極的な問題提供の意義はもつように考えられる。